

日本の採卵鶏飼育環境とその問題 ～動物福祉の観点から～

佐藤 礼・寺村優希・山田 桂

1. はじめに

2023 年度後期に開講された弘前大学人文社会科学部特設講義「消費者市民社会の実践」の活動の一環として、私たちは動物福祉をテーマとし、その中でも身近な食材の 1 つである鶏卵の生産過程が抱える課題、背景について調査・分析を行った。それを踏まえて、動物福祉の考えを広めるために必要なこと、動物福祉のために自分たちができることなどについて検討した。また、2024 年 1 月 18 日には上記の内容を弘前大学教育学部附属中学校の 1 年生 4 クラスを対象とした模擬講義を 2 回に分けて実施し、中学生との話し合いの時間で動物福祉やバタリーケージについて、双方向で理解を深めることができた。

2. 日本の採卵鶏の飼育環境

動物福祉をテーマにする上で、私たちはまず、動物福祉の概念を深く理解することと、それにまつわる問題の調査を行った。動物福祉とは、「生きて死ぬ状態に関連した動物の身体的及び心的状態のこと」（国際獣疫事務局）と定義されており、動物の幸福度に注目し、動物がストレスなく生きていける環境づくりを目指すものである。動物福祉が対象とするのは、人間が飼育したり管理したり影響を与えたりするすべての動物で、具体的には、畜産動物、展示動物、愛玩動物などがある。私たちはその中でも畜産動物を選んで調べることにした。畜産動物にもさまざまな種類があるが、今回は採卵鶏に注目し、私たちにとって身近な食品である鶏卵について調査した。

調査を進めていくと、鶏卵の生産は多くの問題を抱えていることが分かった。今回はその中の 2 つの問題を取り上げることにした。

第 1 に、バタリーケージという飼育方式についてである。バタリーケージとは 1 羽あたり 20cm × 20cm 程度の非常にせまい金網のケージの中で鶏を飼育する生産方式である。止まり木や砂浴び場などはなく、鶏が本来持っている正常行動への欲求が満たされないため、鶏に過度なストレスを与えているという。

第 2 に、オスヒヨコの殺処分問題についてである。採卵鶏のオスは卵を産むことができず、肉用の品種でもないため、そのほとんどが生後 1 日で殺処分されているという。

これらの問題が起きている原因として、日本国内の鶏卵需要の高さがあると考えられる。日本は鶏卵の消費量が多いため、鶏卵を効率的かつ大量に生産できるバタリーケージが多く採用されている。また、バタリーケージを廃止すると、生産者に大きな負荷がかかり、生産コストが上昇、鶏卵価格が高騰することが予想される。生産者・販売者・消費者らによる

鶏卵への依存度が高いために、バタリーケージ方式はなかなか減らない現状がある。

3. 動物福祉への関心の広がり

日本でこのような現状がある一方で、ヨーロッパやアメリカでは動物福祉への関心が高まり、バタリーケージを禁止する国が増えてきている。こうした動きを受けて、2023 年 7 月、日本の農林水産省は「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」として、アニマルウェルフェアの国際基準を踏まえた畜産動物の飼養管理に関する新たな指針を発表した。しかし、この指針には法的拘束力がなく、バタリーケージを容認する内容であることから、国際基準から遅れているとも指摘されている。

一方、国内でも民間団体では、ケージフリーの広いスペースで生産された平飼い方式による鶏卵や、ストレスのない環境で飼育された鶏卵であることを示す独自の認証制度を創設するなど、動物福祉に配慮した鶏卵の普及を目指す活動が見られる。

こうした中で、さらに動物福祉への関心を広めるために、企業や政府による農家へのコスト面でのサポートや、消費者への認知活動を行っていく必要があると考えられる。また、消費者自身も、動物がどのような環境で飼育され、そこにどのような問題があるかを理解した上で、動物福祉の側面に意識して商品を選ぶことが重要である。

4. 附属中学校での模擬授業

以上のような内容を附属中学校で発表した。発表は 2 クラスずつ 2 回に分けて実施し、発表後に約 10 分間、質疑応答や話し合いを行い、動物福祉やバタリーケージについての理解を互いに深めた。その際、「動物福祉のためにバタリーケージを廃止すべき」、「安価な卵は自分たちの生活に必要であるからバタリーケージ廃止には反対」、「複雑な問題であるため、バタリーケージを廃止すべきかどうか決められない」など、自分たちの話し合いでは出てこなかったさまざまな意見を聞くことができた。このことから、発表を受けて中学生一人一人が自分なりに動物福祉について向き合ってくれたものと考えられる。今後の生活において、動物福祉について考えたり行動したりする若者が少しでも増えれば幸いである。

5. おわりに

動物福祉に関する調査と発表を通して、採卵鶏にとっての幸せと私たち人間の豊かな生活を両立させるにはまだまだ多くの課題が残されており、非常に難しい問題であることを実感した。今回の活動では有効な解決策を打ち出すことはできず、あくまで認知度の向上を目的としていたことから、附属中学校や消費者フォーラムで発表できたことは有意義な経験だったと考えている。採卵鶏に関する情報発信を行ったことで、身近な食品がどのような過程を経て食卓に並んでいるのかということを普段から考えるきっかけづくりができたと感じている。私たち一人一人が消費者としての自覚をもつことが、動物の幸福と尊厳を守るための第一歩である。

(佐藤 礼・寺村優希・山田 桂 弘前大学人文社会科学部)